

学生オリエンティアが減って何が悪い！？

問題が叫ばれつつも、一向に変化の兆しが見えないオリエンテーリング界。先号で特集された学生オリエンテーリング界の停滞を、根本から考える。

前号で、学生クラブの現状が本誌小野さんにより 7 ページに渡りレポートされていた。かつては 1500 名もの参加を誇ったインカレも、現在は（仕組みが変わったためでもあるが）500 名を割る参加人数となった。大学クラブも現在では、阪大が最西端であり、規模を誇った山口大学や広島大学も消滅した。その現状やアンケートをふまえて、今後の学生クラブ活性化のための方策を探るのが、その内容だった。

その記事とは異なる視点で書くために、こんな挑発的なタイトルを付けたのではない。「学生クラブの衰退」「学生クラブと社会人クラブの乖離」は、最近よく指摘される。あるいは「オリエンテーリングの衰退」も声高に叫ばれる。しかし、実は多くの人がそれらを大きな問題だとは思っていないと考えて仕方ない。自分の頭で考えることをせずに、単純に人口やクラブの減少を衰退と捉えているだけなのではないだろうか。何が問題かを徹底的に問いつめることが、問題解決の大きな突破口になると、僕はまじめに考えている。

「何が悪い？」は反語ではなく、何が悪いのか、本気で検討してみよう、という前向きなタイトル（のつもり）だ。

まず、学生自身、学生オリエンティアが減っていることを本当に問題だと思っているだろうか？クラブ員が減れば寂しい。しかし、同級生の仲間は、最後まで一緒だ。追いコンはやらしてもらえないかもしれないが、それ自体寂しいことではあっても、困ることではない。インカレがなくなるのは痛手だろうが、すぐにはなくなるということはないだろう。個人のレベルで見れば、少々の不便はあっても、困ることは何もない。もとより、新入生を勧誘し、クラブに定着させるには、実はものすごいエネルギーがいる。それくらいなら、新入生が減る若干の不便を耐えるほうがまだ。

社会に出てオリエンテーリングを続ける卒業生が少ないことも問題視される。組織の視点から見れば困ったことだが、本人たちが困る訳ではない。社会に出れば、楽しいこともやるべきこともいくらかもある。オリエンテーリングがなくても充実した生活が送れる。

一方、地域クラブの側はどうだろう。高齢化は少しづつ進行するので、突然クラブ員がゼロになるわけではない。活動を少しづつ縮小していけば済むだけの話だ。若手の卒業生を毎年獲得した入間の元会長田中氏は、濡れ出に粟で彼らを獲得した訳ではない。まさに「三顧の礼」を尽くして、彼らを迎えたのだ。新しい人を招き入れ、円滑にクラブ活動を進めるのはそれほど大変なことだ。それなら、これまで通りの仲間と楽しくやっていたほうが遙かによい。だいたい、一部のクラブを除けば、大学卒業生のパワーの恩恵には浴していないので、学生と社会人の乖離といっても、問題点を痛切には感じにくいのではないだろうか

じゃあ、おまえは問題意識がないのかと言われたら、公的立場ではもちろんのこと、30 年以上オリエンテーリングをし、それを通して充実した人生（と少しばかり辛い場面）を経験してきた者として、なんとかしたいと思い、行動もしてきた（その一部始終は是非村越日誌をお読みいただきたい）。しかし、組織的に特効薬があるかと聞かれると、「当たり前」の回答しか思いつかない」ということを、正直に白状しよう。

●問題でなくポジティブな面を見よう
しつこく指摘したように、「問題あり」というキャンペーンは、大きな力を持たない。だとすれば、ポジティブな側面を掘り起こすことが行動の力になるはずだ。クラブとして取り組むとしたら、一度クラブで話し合ってみてはどうだろうか？クラブのあり方を改めて問い直すことにつながるだろう。

学生を支援をすることで、あなた自身、そして学生たちが何を成すことができるのだろうか？

●学生の活動を支援しよう

たとえば、この春、関西では社会人が学生の支援に立ち上がり、新勸・歓の行事の手伝いをするので、学生の

負担を軽減することを実行に移した。その中で、トップ選手による指導法の勉強の場も提供された。大学OBの多いクラブなら、このようなオファーもしやすいのではないだろうか。

卒業していきなりクラブに誘われても、それまでの接触がなければ、学生も引いてしまう。日頃の協力関係があってこそ、そのクラブに入ってもいいかな？と思わせる力になる。学生を活性化すると同時にそのエネルギーをもらういいチャンスになるはずだ。

●自分の地域に就職する学生に声をかけてみよう

クラブ運営に熱心な人の中には、インカレに出かけて、卒業生の勧誘をする人がいる。大学を回って、自分の地域に就職する人を聞き出したり、勧誘の言葉をかけたり、ビラを配ったりすることは難しいことではない。ところで、そのビラは配られた卒業生にとって魅力的だろうか？そういう疑問が浮かんだとしたら、クラブの活動を見直すいいチャンスである。

●自分のオリエンテーリングを見つめなおそう

自分にとってクラブでの活動は楽しく、充実したものだろうか？もしそうでなければ、いくら学生をクラブに誘っても、その言葉は力を持たない。4 月上旬に、静岡大学の学生に新入生勧誘のためのワークショップをやった。終わった後の感想で、「勧誘って、自分のオリエンテーリングの全てが問われますね」という印象的な感想を聞いた。いくら言葉で「楽しい部活だよ」といったって、その楽しさを具体的に語れなければ、リアリティーは生まれえない。同じことは社会人クラブにも言えるのではないだろうか。

これら全ては、恥ずかしいくらい当たり前で、青臭い発想に思えるかもしれないが、「Jリーグの「スポーツでもっと幸福な国」なども、相当青臭い。あるいは、ノーベル経済学賞を取ったグラミン銀行のマイクロクレジットだって、貧困な人に無担保というあり得ない方法で金を貸しながら、借りた方も貸した方も損失がないというかなり青臭い発想で成功を収めている。この時代、意外と青臭い発想には効力があるかもしれない。（村越 真）